



TITLE:

東アフリカ牧畜民：サバンナを生きる

AUTHOR(S):

田, 暁潔; 泉, 直亮

CITATION:

田, 暁潔 ...[et al]. 東アフリカ牧畜民：サバンナを生きる. 京都大学アカデミックデイ2014：ポスター/展示 2014

ISSUE DATE:

2014-09-28

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/196021>

RIGHT:

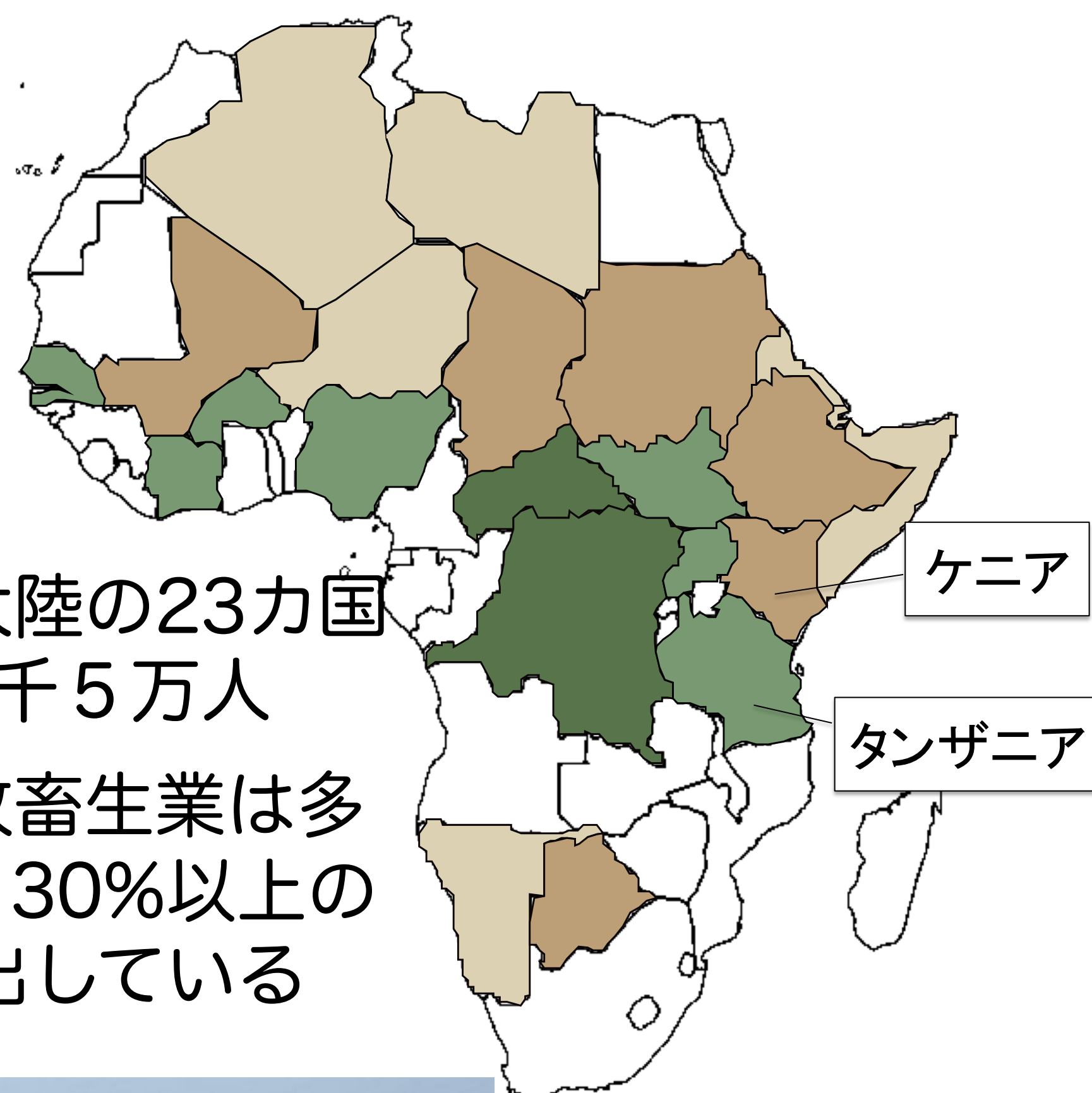
牧畜民の研究 in Africa

アフリカの牧畜民って、どんなひと？

- ❖ アフリカの乾燥・半乾燥地域に、家畜（ラクダ、ウシ、ヤギ、ヒツジ）と共に生きている人びと。
- ❖ 農耕と牧畜を一緒に行なっている半牧畜半農の牧畜民もいる。

アフリカ大陸の23カ国に
いる約2千5万人

牧畜、半牧畜生業は多数の
国で、30%以上のGDPを創出している



牧畜って、どんな生活？

- ❖ 牧畜民は、乾燥した自然環境で、限られた牧草と水をもとめて**家畜を移動**させる。
- ❖ 牧畜とは、人間が直接利用できない植物を家畜に摂取させることによって、**血、ミルク、肉などの畜産物**に変換する食料生産様式である。（生業、生態学的適応）
- ❖ 文化・社会も、家畜と強いかわりをもつ。例えば、ウシが婚資（結納「牛」）になったりする。



Picture by XiaoGang Sun



Picture by XiaoGang Sun

ラクダの放牧と採血をおこなうケニア北部の牧畜民レンディーレ

アフリカの牧畜研究の目的なに？

牧畜社会は未開ではなく、私たちと異なる**‘知’のシステム**を持っている。
それを理解するために...

- 無文字の牧畜社会の多様な**言語**を理解し、記述する。
- 牧畜社会の**文化や社会構造**を理解する。
- 乾燥・半乾燥地域における**牧畜民・家畜・自然環境**の三者のかかわりを明らかにする。
- 牧畜を**経済や牧畜技術など多様な側面**から理解する。

周辺化されてきた牧畜社会は**諸外因**によって、**変化**している。その変化を**解明**するために...

- 近年の牧畜社会は、近代化や定住化などのさまざまな変化を経験している。牧畜社会がそのような**変化に対してどのように適応するのか**を明らかにする。
- 国家や市場経済のなかに、どのように**包摂されるのか**。



picture by: Itaru Ohta

トゥルカナの男性とお気に入りの去勢ウシ



picture by: Itaru Ohta

井戸からラクダに水を運ぶトゥルカナの青年



スクマの家族とお気に入りのウシ



子ヒツジとマサイの子どもたち



事例1

ケニアの牧畜民・マサイの在来知識



搾乳するお母さんと子どもたち

変化するサバンナとマサイ社会

季節：雨季と乾季(降水量150～500ml)
大型野生動物：ライオン、ゾウなど
気候変動の影響：不規則な旱魃が多発



雨季から乾季へ

❖ **マサイ**は：乾燥・半乾燥のサバンナ地域で、ウシ、ヤギ、ヒツジとともに暮らす牧畜民。

変化するマサイ社会：
➢ 近代化、定住化と土地私有が進む
➢ 生業の多様化：観光、農業など
➢ 増加する人口、など

マサイの在来生態知

❖ **牧畜社会の在来生態知**とは：直接に家畜、自然環境とかかわる生活様式をもつ牧畜民が、長い歴史に渡って育んできた家畜管理の技術と自然環境に関連する知識、信念と実践の総称である。



家畜管理の技術：
➢ 個体識別
（経産ウシの命名）
➢ 家畜群の放牧
➢ 健康管理
➢ 繁殖管理



自然環境の認識、管理と利用：
➢ 土質、植生、地形による土地の分類と命名
➢ 植物の命名と利用
➢ 水源の管理と利用

研究テーマ： マサイの在来生態知はどのように蓄積してきた／いく？

研究対象：
学校に通う子ども＋学齢未満の子ども

研究方法：
子どもたちの牧畜活動や、家畜と自然環境とのかかわりを記録し、その過程で必要とされる在来生態知がどのように習得・実践されているのかを分析する。



家畜の世話を
する2歳児



放牧用の杖
を作る牧童

今までの結果例：
❖子どもたちの牧畜活動への参加は成長とともに、内容が変化し、家畜と一緒に移動する範囲も拡大している。



家の近くで搾乳する子どもたち



日帰り放牧へ行く牧童

これからの課題例：
❖予測できない自然変化（野生動物の出没など）は牧畜活動に参加する子どもたちの日常的な課題である。そのような変化に対処するため、在来生態知はどのように利用されているのかを解明する。

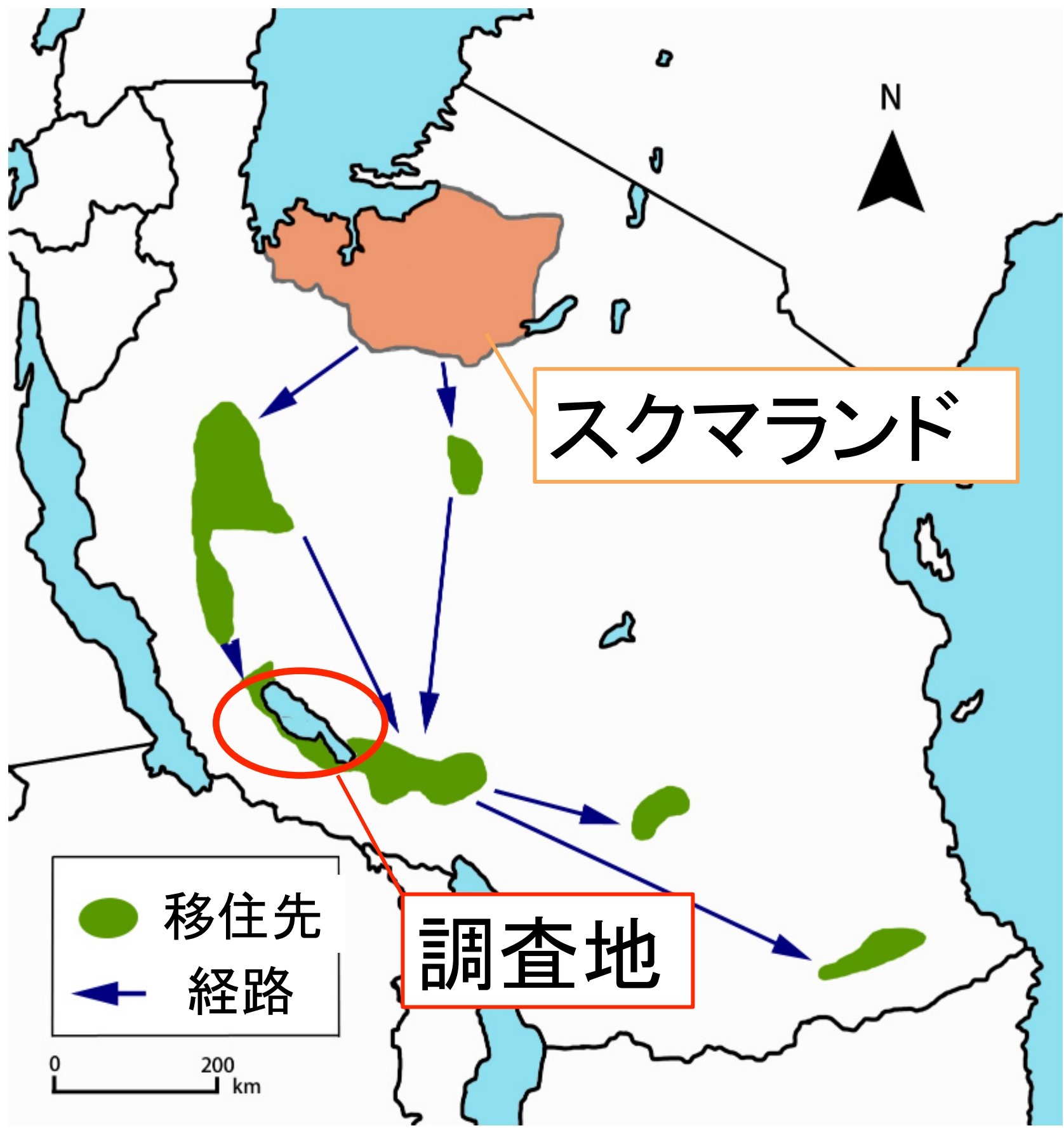


事例2：タンザニアの牧畜民スクマの移住とその後の暮らし

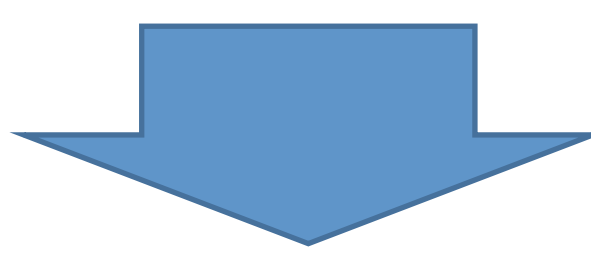
1. 研究の目的

ウシの放牧地を求めて移住したスクマの人びとの暮らし（社会・経済）をあきらかにして、他民族や国家との共存を考える。

2. スクマの移住



- 1910～60年代、イギリスの植民地統治下でスクマランドの開発→放牧地が不足
- 独立後の1960年代から社会主義で集住化政策→集まって住むとウシが飼えない



1970年代～：一部のスクマは、ウシの放牧地を求めて、未開の土地を開拓して移住している。

3. 移住先でウシを増やした

- 大人数の家族の世帯で、ウシ牧畜・自給的な農耕（牛耕・稲作）
- 1世帯あたりの平均は、17人、ウシ260頭。
- 大規模な世帯では、約80人で、ウシ約4,500頭！

大富豪の牛群、約1,200頭



牛耕で水田を耕起する



4. 1990年以降：牧畜の限界と打開策

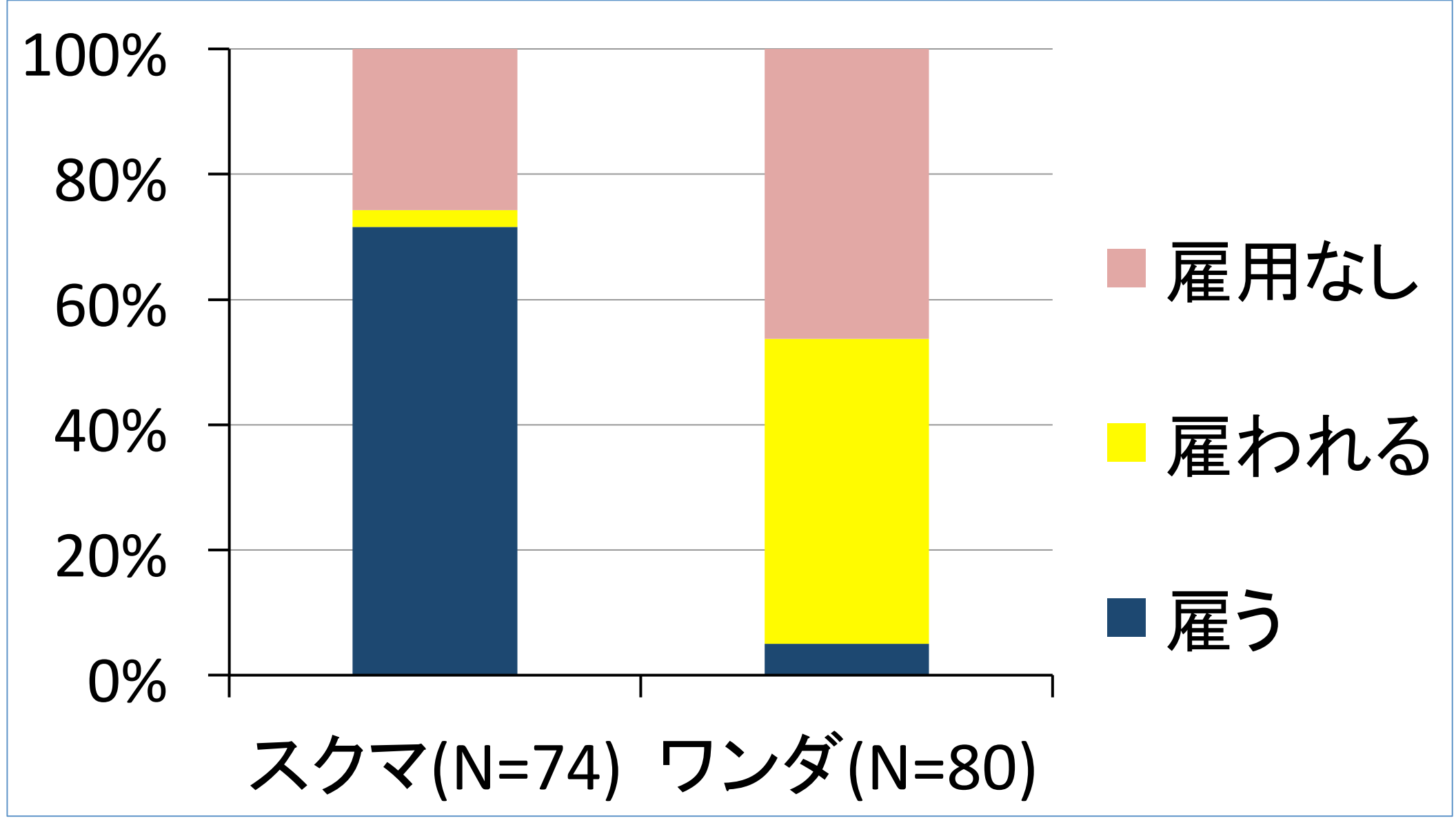
- 動物保護政策→ウシを減らす圧力
- 未開の放牧地が少なくなっている。

➡ ウシばかりに頼ってられない！

- 社会主義の挫折→市場の自由化

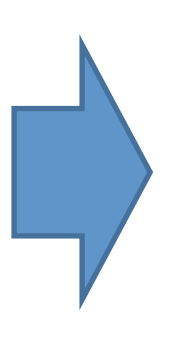
➡ ウシを増やすだけでなく、売ろう。コメも余分に作って、売ろう。

➡ 近くに住む、家畜をもたない農耕民（ワンダ）を雇って稲作を拡大。



スクマ世帯の7割がワンダを雇う。ワンダ世帯の半分は、スクマから収入を得る。

一部のスクマは、ウシとコメを売って農業以外の商売に投資



ホテルの建設・経営

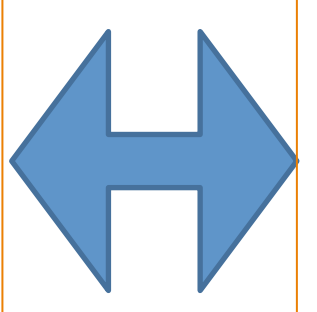


トラック運送業

5. まとめと課題

スクマの経済活動の多様化

動物保護・観光業のために、ウシを減らしたい政府



- 農村地域での雇用、セーフティネット
- 都市部への食糧（コメと牛肉）の供給